

宝物は足元に。
僕にとっての“宝物”は「島唄」でした。

VOICE

前山 真吾さん

2001年 情報処理科 卒業



PROFILE

浦上町出身。高校時代は級友とロックバンドを組み自分たちでチケットを販売してライブ活動を行うなど「島唄」とは無縁の高校生活を送っていた。むしろ島唄は「嫌い」な音楽だった。当時はミュージシャンへの憧れを心のどこかに燻して過ごす日々。諦めきれない夢にどうにか食らいつつあった。

奄美高校卒業後は、奄美看護福祉専門学校へ進学。ふと訪れた加計呂麻島で自らの人生を大きく動かす出逢いが・・・

現在は、介護老人保健施設でケアマネージャーとして働く傍ら「島唄」を世界に広げる活動を精力的に行っている。6月19日に行われた初のワンマンツアー「AMAMISM」は大盛況のうちに幕を閉じた。

「いつ、どこに『きつかけ』『チャンス』があるかわからない。そのいつかわからない『出逢い』に気づくために、毎日、自分ができていることに一生懸命であること。やらなかった後悔より、やって後悔。自分としっかりと向き合っていれば必ずチャンスは来る。その瞬間に『心と身体』がしっかりと反応できるように、毎日を過ごしてください」とメッセージをいただいた。

後輩たちへ

「島唄」を「若人へ」「未来へ」「世界へ」
現在は、「自分の『心』を育ててくれた島唄」「島の文化の象徴である島唄」を若い世代へ繋いでいく活動を精力的に行っている。
前山さん自身も若い時は、好き好んで聴くことのなかった「島唄」若い世代が島唄に親しみがもてない気持ちは痛いほどわかる。若い世代に「島唄はすごいんだよ」と言っても伝わらない。カッコいい音楽の「島唄」としてアレンジを加え、新しい命を吹き込みながら島唄の裾野を広げ、より多くの人に島唄の深い趣に出逢ってもらいたいという語気を強める。

“Chase Your Dream” -Alumni

「あまここの」先輩にフォーカスをあてる「Chase Your Dream」あまここの「ソノサキ」で見た景色を後輩たちへ



島唄との出逢いは突然に

島唄との出逢いはあまりにも突然だった。

夏祭りのボランティアで訪れた加計呂麻島で名も知らぬ唄者の方が歌い始めた島唄に心打たれた。その島唄が耳に入ってきた瞬間に身震いし、準備の整はずのない心と身体の器は、その時の感情を処理できなかった。ふと気がつけば、朝の支度、車の移動中、就寝前まで、暇さえあれば島唄を口ずさみ三線を弾き、師と仰ぐ「石原久子」さんの島唄が収録されたカセットテープを擦り切れるまで聴き込み、島唄教室に通い始めている自分自身の姿があったという。

島唄との出逢いが「心」を育ててくれた

加計呂麻島で島唄に出会うまでの「島唄」へのイメージは「ダサイ」「カッコわるい」「年寄りの音楽」など、良いイメージはなかった。しかし、生の島唄を聴いてから、そのイメージは跡形もなく消え去った。島唄に対しての尊敬の念も芽生えた。島唄に触れてこなかった自分を恥ずかしくも思い、もっと幼いときから島唄に触れていれども思った。

島唄にのめり込み始めたタイミングは、「元ちとせ」さんの「ワダツミの木」が世間を賑わしている時だった。これは良くも悪くも前山さんの「心」を揺れ動かした。高校時代は島唄とは対極ともいえるロックバンドで青春を謳歌していた。島唄との出逢いを知らない人たちからは、「流行りに乗った」「あいつが島唄を」などと思われ捉えられ方をされてしまい、悔しい思いをした。一方で、就職活動で訪れた東京池袋で敢行したストリートライブでは名も無き唄者の島唄でさえも、多くの人の足が止め、聴き入る姿を目の当たりにし自分が加計呂麻島で島唄に出会った時のように、「島唄には説明のいらぬ『人の心を動かす』魔法の力』があることを改めて実感できたという。

今では島唄と出逢うタイミングに狂いはなかったと思うが、当時は島唄に対する「自分」の在り方に自問自答する日々が続いたという。

人生の選択 拠点は「奄美」か「それ以外」か

20歳の進路選択は、「葛藤」の連続だった。東京で歌手として生きていくという選択は常に頭の中にもありながらも島唄への想いは募るばかり。世間一般に島を出ることが「当たり前」の中、人生の選択には時間を要した。「島を出るタイミングは“今”しかない」「島唄は“島”で学んだほうがいい」どちらも譲れない選択だった。悩み悩んだ末の答えは「島」で生きていくこと。「島唄への情熱を燃やし続けるには島に残ること」島唄への想いが人生の選択を決心させた。